

## 「聞き書き」の実践とその教育効果の検証

土居 裕美子 (Yumiko DOI)

### 【背景と目的】

本事業は、学生「聞き書き」ボランティアによる地域住民を対象とした「聞き書き」活動を行うことを通して、「聞き書き」の取り組みが世代間交流による相互学習としてどのような効果があるか、特に看護・福祉の観点からの教育的効果と課題を明らかにすることを目的とするものである。

「聞き書き」とは、一般に「対象となる語り手の話を聞き、それを語り手の話し言葉で文字化し、それを語り手に還元する」と定義される活動である。一般市民のボランティア活動から始まったとされるが、近年、医療や福祉の世界で関心が高まり、多くの実践が報告されている。

本学では、平成29年度に、鳥取県からの委託事業として、鳥取県中部地震における被災者および支援者を対象とした学生8名による「聞き書き」を行い、その成果を『聞き書き集 鳥取県中部地震の記憶』として刊行した<sup>1)</sup>。また、平成29年度から、1・2年生がボランティアとして参加する「まちの保健室」の課題レポートに「聞き書き」を課し、「まちの保健室」参加者の言葉に耳を傾け、文字化する取り組みを行った<sup>2)</sup>。これらの取り組みから、「聞き書き」には世代間交流を通じた対話力・コミュニケーション力の向上に加えて、看護職を目指す学生として、他者を尊敬・尊重する心、豊かな人間理解、出会いから学ぼうとする姿勢と態度の育成など、地域の人々との関わりを原点とした教育としての可能性があることが推察された。

このような取り組みを背景として、本事業では、深いコミュニケーションの過程を経た「聞き書き」の教育的効果と課題とを明らかにし、これを看護学教育としての「聞き書き」実践モデルの一例として提示することを視野に入れ、活動を行うこととした。

○共同研究者

伊藤 順子 (鳥取看護大学 看護学部 看護学科 助教)

山村 裕子 (鳥取短期大学 幼児教育保育学科 助教)

### 【活動・研究の概要】

#### 1. 「聞き書き」(聞き取り)の実践

○第1回

- 1) 日 時 平成30年12月14日(金) 16:00~18:00
- 2) 場 所 「聞き書き」対象者自宅(倉吉市内)
- 3) 対象者 倉吉市在住80代男性(ご家族2名同席)
- 4) 実践者 鳥取看護大学 看護学部看護学科1年生(2名)

○第2回

- 1) 日 時 平成31年1月19日(土) 13:30~15:00
- 2) 場 所 鳥取看護大学
- 3) 対象者 鳥取市在住70代女性(元鳥取市保健師)
- 4) 実践者 鳥取看護大学 看護学部看護学科2年生(2名)

## 2. 実践の概要

### ○第1回

「聞き書き」に参加した学生は、鳥取看護大学1年生2名であった。「聞き書き」についての説明と練習は、7月・10月に行い、「聞き書き」活動への参加希望があった学生の中から、日時の合う2名に教員1名が同伴し、対象者の自宅を訪問する形で行った。当日は、対象者の家族（奥様・お嬢様）が同席し、和やかな雰囲気の中で2時間にわたってお話をうかがうことができた。

平成31年1月末現在、学生による録音した内容の「書き起こし」作業が継続中である。2月中旬以降、2回目、3回目の訪問を予定しており、複数回の聞き取りの中でその方に向き合っただけで傾聴した上で、編集、デザイン、製本の作業を行う予定である。

### ○第2回

「聞き書き」に参加した学生は、鳥取看護大学2年生2名であった。いずれも、平成29年度の『聞き書き集 鳥取県中部地震の記憶』に「聞き書き隊」として活動した学生である。教員2名が同席し、本学個室で聞き取りを行った。対象者は、元保健師で、保健師の仕事について、また次世代に伝えたいことなど、具体的かつ専門的なお話を熱く語ってくださった。

なお、第1回目の「聞き書き」と同じく、平成31年1月現在、学生による「書き起こし」作業が継続中である。

## 3. 「聞き書き」振り返りの実施

1) 日 時 平成31年1月18日（金）16:30～17:30

2) 場 所 鳥取看護大学

3) 内 容

第1回の「聞き書き」に参加した学生（1年生2名）と、研究者とで振り返りを行った。書き起こし作業の進捗状況や、今後の予定等について確認した上で、「聞き書き」に参加した動機、1回目の「聞き書き」に参加した感想や意見、今後の取り組みについてインタビューをおこなった。

4) 倫理的配慮

インタビューの内容について、「聞き書き」の教育的効果の検証を目的とした分析を行うこと、ICレコーダーに録音することについての了承を得た。その際、個人情報保護の観点から、個人の特長がされないようにすること、インタビューで知り得た情報は研究以外の目的で使用しないこと、インタビューは強制ではなく、中断も可能なことを説明し、不参加・中断の場合でも不利益にならない旨を説明し、了承を得た。

## 【結果と考察】

上記2回の「聞き書き」を実践し、第1回目の参加者（1年生2名）に振り返りインタビューを行った。語られた内容を、1. 参加の動機、2. 実施後の感想、3. 今後の学びへの関連付けの3点に整理し、その内容と具体的発言例を以下に示す。

### 1. 参加への動機

参加への動機については【「人を知る」ことへの興味】【「書く」ことへの興味】【看護の学びに活かしたい】があった。具体的には、「その人の生きてきたものが見えるし、いろんな方のことを知れるというのが、とても興味深くてやってみたいなと思いました」「言葉口調で書くというのが昔から好きで、（「聞き書き」講座で体験した時に）すごく楽しくて」「個性が出るので、そういう意味で、方言とかが喋られていたりすると、すごいおもしろいなって思って」「これからの実習とか

でも使うことになってくると思うので、その勉強をしておきたいなって思って」などであった。

すでに「まちの保健室」で「聞き書き」の実践は一度行っている学生たちであったが、さらにその後、自分の祖父母に昔のことを聞いて書いてみるなど、「聞き書き」に強い興味と意欲を持って参加しており、特に聞くこと・書くことのスキルを高めて、看護の学び（特に実習）に活かしたいという気持ちが見られた。

## 2. 実施後の感想

初めて対象者のお宅を訪問して「聞き書き」を実施した感想については、【緊張】【自身が経験できないことを聞ける】【「インタビュー」との違い】があった。具体的には、「やっぱり、まずは緊張しました」「自分が経験したことのないことを聞けたので、すごいなということと、やっぱり聞きに行ってよかったなというのを強く思いました」「教科書や映像でしか知らないことを、実際に体験された方から聞くというのはこの先はあまりないんじゃないかなと」「非常に貴重な体験だったなと思います」「インタビューでは、例えば話していて、でもまだこっちに項目があるからこっちも聞かないと、というのがあって」「『聞き書き』はその人の特徴とか喋り方や抑揚のつけ方をちゃんと聞きながら話をしないといけない」「『聞き書き』は、書くときにその人のことをずっと考えながら書いているんで、記憶度ということが全然違っていて」などであった。

1年前期の「生活健康論実習」、後期の「フィールド体験実習」でのインタビューと比較する感想が多く聞かれた。特に「フィールド体験実習」では、今回の「聞き書き」と同じように、対象者の自宅を訪問してインタビューを行っており、両者を比較して、インタビューでは自分が聞いた内容を引き出す力が必要であること、「聞き書き」では、対象者の語りたい内容を受け止めながら傾聴した上で、後日冊子にして差し上げることを想定して、話の内容だけでなく、その人自身を捉え、記憶していく必要がある、といった認識が見られた。

## 3. 今後の学びへの関連付け

今後の学びに関連付けた発言として、自身の学びとして【知識・思考の広がりを得る】【コミュニケーション力の向上】【人間理解の向上】【看護を学ぶ意欲の向上】などがあった。具体的には、「能力的には、聞いて、うまくまとめる力は上がったのかな」「話す中で、その人の考え方がわかって、自分が同じような体験をしたときにこういう考え方もあるんだなと学べる」「話す楽しさだけじゃなくて、(対象者が)思い出して、自分の人生を振り返って、楽しくなるということもあるのかな」「自分のことに興味を持たれるということがすごく嬉しいんじゃないかな」「これからもっと思いを受け止めることのできる力をつけていきたい」などであった。特に、看護職を目指す学びの中で、自身のコミュニケーション力を振り返り、「聞き書き」を通して克服していきたい、力を付けたい、という思いがあった。さらに、日本の高齢者だけでなく、多くの年代の方や、在日外国人にも「聞き書き」をしてみたいという意識の広がりも聞かれた。

高齢者への「聞き書き」を通した看護学生の学びについての先行研究では、例えば高齢者の生活歴を通して自分たちの生活歴を振り返るきっかけとなることや、発達課題や老年期の世界観と関連した学習効果、高齢者の様々な側面をプラスに捉える機会となることなどが指摘されている<sup>3)</sup>。また、コミュニケーションに関する学びとして、聞き取りやすい話し方や、座る位置、視線を合わせること、自身の気持ちを整えること、会話を促進しながら受容的に接することを学んだという報告<sup>4)</sup>もある。

今回、本格的な「聞き書き」を体験した本学1年生からも、コミュニケーションや対象者理解、自身の学びの振り返りに関する発言が多く聞かれたことから、「聞き書き」を通した複層的な学びの可能性が改めて示唆された。

## 【今後の課題】

本事業では、しっかりと対象者に向き合って、時間をかけて「傾聴」する「聞き書き」を実施することに重点をおいて行ってきた。現段階ではまだ学生による「書き起こし」の作業途中であるが、文章化して終わるのではなく、編集、デザイン、製本まで学生が担当し、一冊の本として贈呈することを予定している。

また、これらの過程を経た「聞き書き」の教育的な効果の検証については、その方法を含めてこれからの課題である。特に、高齢者を対象とした1年生の学びと、元保健師からの専門的な内容の「聞き書き」を行った2年生の学びとでは、また違った側面が浮かび上がってくる可能性がある。現在のインタビュー内容を整理した段階から、ひとつひとつの分析と検証を積み重ねて、教育としての「聞き書き」実践モデルの一例として提示することを目指していきたい。

さらに、近年老年看護学でその教育効果が検証されている「ライフヒストリーインタビュー」・「ナラティブ」との関連性、逆に「聞き書き」をされる側への効果としての、「回想法」との相関性など、周辺にあるさまざまな取り組みの中に「聞き書き」を位置付けていくことも、今後の課題として残されている。

## 《参考文献》

- 1) 鳥取看護大学・鳥取短期大学編『聞き書き集 鳥取県中部地震の記憶』(2017)
- 2) 土居裕美子「鳥取看護大学の『聞き書き』の取り組み—『まちの保健室』における事例の検討を中心に—」『第1回 地域とともに歩む大学の実践報告会～『まちの保健室』の取り組みから～ 抄録集』(2018)
- 3) 駒谷なつみ 他「高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと」『保健科学研究』第8巻1号(2017) pp.33-40
- 4) 駒谷なつみ 他「高齢者への聞き書きを通じた看護学生の学び」『日本看護研究学会雑誌』第39巻3号(2016) p.299